

ヒロシマ 伝え続ける

被爆者治療母の姿胸に

語り部 決意新た

福岡県遺族代表・平さん

広島原爆投下から71年となった6日、広島市の平和記念式典に福岡県の遺族代表として初参加した大野城市の平宏文さん(81)は、今は亡き母親のミドリさんの写真を手に式典に臨んだ。親子で被爆したあの日、医師のミドリさんは必死に被爆者に向き合い、平さんも子どもながら懸命に手伝った。「戦争のむなしさを子どもたちに伝え続けなければ」思いを新たに福岡で語り部活動を続ける。

【一面参照】



10歳だった平さんは爆心に使うチンク油を持ち、被爆者を探るミドリさんの後ろを、平さんはついて回った。「痛い痛い」と訴えながらくたされた老人もいり、目の前の光景があまりにもむごたらしくて、被爆者の声はほとんど頭に入らなかつた。

家に戻ると、市内で被爆して帰ってきたミドリさんがおり、やがて治療を求め上泊まり込んで治療にあたり、赤黒く焼けた髪、毛はちりちり、服はボロボロ。「まるでお化けのようだった」。家の中だけではスペースが足りず、納屋に庭にむしろを敷いて重症者を寝かせた。やけど治療

に使うチンク油を持ち、被爆者を探るミドリさんの後ろを、平さんはついて回った。「痛い痛い」と訴えながらくたされた老人もいり、目の前の光景があまりにもむごたらしくて、被爆者の声はほとんど頭に入らなかつた。

身も3年前に大腸がんを患った。平和記念式典を説き、米大統領の演説が引用された。核廃絶が強調された。照りつける太陽の下、黙とうをささげた平さんは「71年前の広島は地震だった。原爆の使用は一度と許してはならない。人生の峠をどうに越したが、語り部として第一線で頑張りたい」と力を込めた。(御厨岡陽)



⑤医師として働きながら、原爆の語り部活動を続けた故平ミドリさん
⑥式典を終え、語り部への決意を新たにする平宏文さん
11日午前9時すぎ、広島市中区